

言語文化教育研究学会第九十九回例会

「ダイアレクト」リプレイ

禁じられた娘たち

目次

はじめに——私たちが生きる、この共同体のこと	1
自己紹介	4
時代一	9
時代二	20
時代三	32
遺されゆくもの	42

本リプレイは、令和七年三月八日に、行われた、テーブルロールプレイング「ダイアレクト」(<https://harrowhill.rdy.jp/Games/Dialect>) のリプレイ (当日のプレイの記録を編集し読み物にしたもの) です。本プレイ会は、言語文化教育研究会第九十九回例会の一貫として開催されました。

本プレイにあたっては、「ダイアレクト」に記載されているバックドロップ「禁じられた子どもたち」をベースにし、登場人物を全員少女たちに変更するなどの改編を加えた翻案バックドロップ「禁じられた娘たち」を作成し、それをもとにプレイしています。

また「アイソレーション」および登場人物については、令和七年二月八日に開催されたオンラインワークショップにて、参加者とともに作成しています。

なお、本企画は、JSPS 科研費 JP20K02877 の助成を受けて開催されたものです。

はじめに——私たちが生きる、この共同体のこと

「社会」で生きることを拒絶し、そこから逃避してきた少女たち——私たちは、「社会」からそのように呼ばれていない。

生きてきた場所も、信じる宗教も、そしてもちろん性格や好きなものも、まったく異なる私たち。そんな私たちは、ある問いを共有していた。「私たちって、人類を増やすために生きてるんですかね」——そんな問いだ。この問いが、私たちのなかで大きく渦をなし、その渦のなかで、自身を——あるいは大切な人たちまでも——傷つけてきたし、おそらく、いつまでも、その傷は続いていくだろう。私たちは、その過去を、傷を、共有していた。が、その傷も思いも、私たち以外にはまったく共有できるものではなかった。外に広がる「社会」は、私たちを捉え、「正常なる人生」を歩ませようとし続ける。彼らは、「正常な人生」こそが、私たちを助ける方法だと思い込んでいるからだ。なぜなら、人類を増やすことは、「社会」全体にとっての「正義」だから。

私たちの「社会」は、子どもたちが一定の年齢に達したときに、産む人間／産まない人間を選別するシステムを有している——昔も、そして、今も。「産む人間」とされた者は、本人の意思に限らず、子を産むことを強制される。「産まない」側とされた人間はその逆だ。もしそれでも子どもを産むことを望むなら、その者はこの「社会」から「排除」されると言われている。私たちは、「排除」された人間に会ったことはないし、「排除」された人間たちがどこに行くのかを問うことさえ許されない。——そう。そのシステムは、「社会」全体による合法的な「安楽死」なのだ。

私たちの多くは、それぞれにその人生のなかでそのシステムの存在を知り、それぞれの理由でそれを嫌悪し、耐えきれずにここに辿り着いていた。そんな私たちに、当然のことながら「社会」での居場所はなかったし、「社会」か

ら捉えられることを恐れてさえた。「社会」に私たちの存在が明るみになれば、「社会」の側の大人たちがここに押し寄せ、私たちを強制的に連行してしまうだろう。強制収容所に送還され、「教育」という名の「洗脳」を受けること——それは何よりも、私たちにとって恐れるべきことだった。

だから、私たちは、私たち自身で、「社会」の視点に捉えられないように、この隠れた場所で生きていくことを決意した。「社会」とのつながりを絶って生きることができるとかどうか、私たちに未来があるのかどうか。それは誰にもわからない。確かなことは、私たちが生きられる場所は、「社会」にない、ということ。ただ、それだけだったのだ。

私たちが生活を営んでいた、あの場所のことについても、話をしておきたい。

そこは、都会のただなかにある、鬱蒼とした廃墟群だった。そこは、「社会」の人々が住んでいる場所からもそれほど遠くない。それにもかかわらず、私たちが「社会」から隠れて生活ができたのは、なによりも「噂」のおかげだった。都会の真ん中に突如できたこの場所は、その外見の不気味さから、かつてから、多くの「噂」が流れ続けている。「この場所に一旦立ち入った者は、二度と出られない」とか、「現代の「バミューダ・トライアングル」とか、その言われようはさまざまだ。しかしこれらの都市伝説めいた「噂」は、私たちにとって福音だった。「社会」の人々を遠ざけるこれらの噂が、私たちの姿を隠してくれていた。「噂」が、私たちを守ってくれていたのだ。

人々の恐怖の対象でありながら、興味を惹きつけてやまないこの場所について、日々、数多くの「噂」が流され続けていた。インターネットや口コミを通じて流れてくるそれらさまざまな「噂」。その中には、実は、ごくたまに「真実」がまぎれることがある。「社会」の中に生きるとく限られた数の大人たちは、この「真実」を知っており、そういう大人たちが、私たちに手を差し伸べてくれていた。彼らは、助けを求める私たちに、そっと、「社会」に知られないように、その「真実」を手渡す。私たちは、そんな大人たちに手助けされながら、あるいは、自身の力で

「真実」を見つけ出し、この場所にたどりついたのだった。

インターネットと大人たち。それは、私たちにとっては生きる糸口そのものだった。この場所に辿りついたあと、それらは、私たちが生きる糧を得るための、たった二つのルートであり続けた。

この廃墟群には、同じような境遇の少女たちがそれぞれに群れをなして、それぞれのお気に入りの場所で暮らしていた。私と同じ年のフェイ、年上のラフーシャさん、ビリーブさん、真理さん、そして私がともに暮らしていたのは、さびれたラジオ局だった。この場所で、衛生的な生活を保つのはとても困難で、私たちは、自然から被る被害や、感染症が広まるリスクに常にさらされていたけれど、年長の人たちが、私たちの生き延びるための方法を、これから私たちがどうあるべきかを常に考えてくれていた。当時、まだ幼かった私にはよくわからなかったけれど、私たちの共同体では、より早く初潮を迎えた人たちが「生徒会」をつくって、ここで起きるいろいろな困りごとを解決してくれていたらしい。「生徒会」の中の役割は順番が変わっていつていつていうようで、真理さんが「次は、私がリーダーなの」と嬉しそうに言っているのを、何度か目にした記憶がある。それを見るたびに、私は不思議だった。なぜなら、「生徒会」の意思決定は、いつも「じゃんけん」で行われていたのだけれど、真理さんはいつも事前に根回しをして、自分の思いどおりになるように、他の人を動かしているように見えたから。それでも、わざわざ「生徒会長」になることになにか意味があるとは思えなかったけれど、それでもその期間だけ「生徒会長」でいられる、ということとは、真理さんにとって特別なことだったのかもしれない。

思い出そうとすると、とめどなく、あの時の私たちのことを話したくなる。話しつづけていたくなる。話しつづけていないと、あの時の私たちの存在が、消えてしまうような気がしてしまう。——だから、あなたに、聞いてほしい。確かに、そこにあったはずの、私たちの物語を。

自己紹介

ファンリテーター（F）… まずは「自己紹介」から始めたいと思います。プレイヤー本人ではなく、キャラクターの自己紹介ですね。設定を確認してから【時代1】に進んでいきたいと思いますのでよろしくお願いします。こんな感じでいきましょう。私は、「さら」です。「さら」の本名は「田中愛子（たなか・あいこ）」と言います。十二歳です。ここに来るときには、フェイさんと一緒にここまで来たという設定にしました。（アーキタイプ）は「無垢なるもの」です。私の存在は全ての（アスペクト）に関係しています。テーブルの上に、前回考えた（アスペクト）を三つ、カードで示しましたが、これら三つすべてに関係しています。

【アスペクト】

① 目に見えず

私たちが占有しているスペースは、都会のただなかにある、鬱蒼とした廃墟である。「社会」の人々が住んでいる場所からもアクセスできるところにあるはずなのに、その外見の不気味さ、人々が流す噂の数々の影響によって、そこは「社会」から断絶している。

② 打ち捨てられて

「社会」には私たちの居場所はない。なぜなら、「社会」は、私たち子どもが一定の年齢に達したときに、産む人間／産まない人間を選別するシステムを有しているからだ。私たちの多くはそのシステムを嫌い、耐えきれずにここに辿り着いたのだ。だから「社会」のなかに私たちの居場所はない。

③ たどりつくための方法(自由アスペクト)

この場所については、インターネットやロコミでさまざまな情報が流れつづけている。その多くは、根も葉もない噂話だったり、人々を怖がらせるための都市伝説のようなものであったりするが、流れる「噂」の中には、ごくたまに「真実」がまぎれることがある。「社会」に生きる限られた数の大人たちは、この「真実」のことを知っている。そして、助けを求めらる少女たちに、そっと、「社会」に知られないように、その「真実」を少女に渡しつづけている。

「さら」は、このすべての「アスペクト」とともにあります。そして、このうちの一つは、「さら」が自覚しているよりも大切なものである、という設定があるんですが、これは「③ たどりつくための方法」の中の「インターネット」にしました。「さら」は、外見に自信がない、というか醜形恐怖を持っているという設定です。なので、インターネット上で出会ってしまうような、悪い噂、この場所にたどりついて住んでいる人たちへの誹謗中傷とか、なんか「産まない人間なんて、駄目だ」みたいな発言に、「さら」本人が思っているよりも深く傷ついているのではないかと思うんです。

このようなかたちで、自己紹介のなかで、キャラクターの設定と、アスペクトとの関係をご説明いただければと思います。こちらからで、よろしいでしょうか？はい。

プレイヤーA.. はい。わたしはフェイ。預言者です。フェイの存在は二つの「アスペクト」とともにあります。「アスペクト①」.. 目に見えず」と「アスペクト②」.. 打ち捨てられて」です。「アスペクト③」.. たどりつくための方法」については記憶を失ってしまっているのですが、もしかしたらどこかで間接的に繋がっているかもしれないんですけど、わたしの今のアイデンティティの中にはないです。

「アスペクト」の三つのうちの一つから、君は神の声を聞く」とありますが、それはこれ(アスペクト①)目に見えず)です。都会のただなかにある鬱蒼とした廃墟。この場所の中に、神の声を聞ける場所があります。何か相談されて、「神の声を聞きましよう」ということになるんですけど、そこに行くのは一人でなければいけない。この場所の中の特定の場所にあります。そこにたどり着くには、狭い通路を通る。フェイはすごく奢者で、十二歳で、中性的な体つきなんですけれども、その体でないと通れない狭い場所をくぐり抜けていく。するとそこには神の声を聞ける場所があって、そこでじっとしていると、神の声が聞こえて

きます。その「神の声」を持って皆さんがいるところに戻って、そして「こんな言葉ができませんでした」ということを告げる。フェイ自身はそれが意味することをそんなにわかっていないんだけど、皆さんは納得してくれるので、「なにかの真実に触れたのかな」と漠然と思います。

プレイヤーB ラファーシャです。本名もラファーシャでよろしくお願いします。私の「アーキタイプ」は「芸術家」ということで、十七歳なんですけれども、既にもう大成してると思いますか、その作品だけが独り歩きして、それがプロパガンダとして、産む者／産まない者みたいなものを選び分けるためのリソース、資源として利用されてしまうっていう出来事があって、そこに深く傷ついてここにやってきました。

私はその二つの「アスペクト」とともにあるということなんですが、やはり、そこですよね。その「社会」のシステム（「アスペクト」）②っていうものに翻弄されている。芸術作品を創りたい、表現したいというだけなんだけれども、なぜか「社会」に利用されたりとか、反対に芸術作品によって「社会」のシステムに組み込まれる人を勇気づけたり…とか、そういうことがあります。

もう一つがこちら（「アスペクト」①）の廃墟ですね。今は、廃墟にいるんですけれども、その廃墟の壁にいろいろなグラフィティといいますが、落書きをしていく。それが今、自分を生かしているものになっています。はい。以上です。よろしくお願いします。

プレイヤーC ビリーブです。途中でイブに変わるかもしれない。本名は、中杉（なかすぎ）ヴィアナとしております。

ギリギリ十五歳、ギリギリ宣告前。産むのか、産まないのかという宣告を受けるギリギリ前という設定です。（「アーキタイプ」は「予言者」ですけれども、「これを知りたい」と思ったらその未来が知れるというわけじゃなくて、自分でコントロールできない中で、私たちの集団のこの先について、なにか画像という映像で見えるときがある、ということなんです。

「それなりに正義感がある」ということを前回（第一回オンラインワークショップで）決めたんですけども、なぜそれなりに正義感を持っているのか、どのような覚悟があってこの共同体にたどりついたのかについては、前回話し合いを設定しきれなかった中で、ずっと考えてきました。なので、この後は私が勝手に作った設定になります。

ビリーブには、かなり歳の離れたお姉さんがいます。年の離れたお姉さんに育てられた。お姉さんは産みたくなかったけれども、宣告によって「産む側」の人間とされた人です。ビリーブとはかなり年が離れていて、十五歳離れているという設定を考えていますが、そのお姉さんは既に三人の子どもを産んでいます。そして三人目の出産によって健康状態を悪化させて、入院をし

ています。ただし、彼女の子宮に問題はないので、「子宮を移植する側」のリストに入っている。しかし、本人は「子宮を移植する側」に入っていることを知りません。うすうす不穏なものは感じつつも、ただ入院しているだけだと思っている。

入院中、お姉さんは、ビリーブに、「あなたは自由に生きなさい」と言います。ビリーブ自身は、自分がどうしたいのかということについて明確なイメージは持っていないんですけれども、「社会」にいななかで、拘束されているイメージ、幸せを押し付けられている感じは持っています。「ここは自由じゃない」という感覚は強く持っていて、この場所にたどりつきました。

たぶん、生来、すごく真面目な人だと思っんですけれども、「自由ってなに？」ということをお問しながらここにいるということ。」「予言者」は、画像として見える部分です。

私の存在は二つのアスペクトともにあるというのがこれ(アスペクト①・アスペクト②)、「社会」のシステムと排除という部分です。三つのうちの一つが、私たちの破滅をもたらすというのは……これ、今言っているんですよね？

F: はい。

プレイヤーC: はい。私達に破滅をもたらすシステムはこれ(アスペクト②)です。

F: はい。ありがとうございます。では、「真理」さん。

プレイヤーD: はい。真理です。十四歳です。本名(林 宝羽月)は、これ「はやし」と呼んでもいいし「りん」と呼んでもいいし、いかにように読んでもいいんですけれども、名前の方は「ほうづき」です。ちょっとしたキラキラネームで、それが本名になっています。

地雷系のファッションで、黒いマスクをつけているという、そういうタイプの女の子です。インターネット上で人気を持っている。

「真理」は、三つのアスペクトともにあるんですが、特に、そのうちの一つのアスペクトのために嘘をつき続けます。私の(アーキタイプ)カードは「嘔吐き」なんですけど、その一つの(アスペクト)のために嘘を吐き続けている。その一つというのが、「アスペクト③」のなかの「インターネット」「SNS」になります。

SNSで、「十万人フォロワーがいる(自称)」と書いています。自分で動画配信をしているんですけれども、フォロワーが十万人だったっていうことを、ちゃんと突き止めた人は誰もいないという感じ。過去においては、自分が貧乏だったこと、それからネットの世界でも、現実の世界でも、ネットを使ったいじめにも遭っていた経験があり、どこにもなかなか居場所を見つけれないでいるんです。でも、自分は何とか周りに認められたいという承認欲求がすごく強い。その承認欲求を満たすために、自分を

誇示しようとした結果、嘘をついてしまうというようなことを繰り返し返していきます。

「情報を発信能力がすごく情報収集能力も強いんだ」と皆の前で言いきっている存在です。よろしくお願ひします。

〔時代一〕

「FF(えふえふ)(罵り言葉)——くだらない「社会」・そこに生きるアイツら

「産む／産まない」を選別する「社会」のシステムを受け入れられない者や、「産まない側」に選別された者に対して心ない言葉を投げつける人々の存在に耐えられず、この場所にきた「さら」。誰も人を傷つけず、誰にも傷つけられないユートピアを夢見てこの場所にきた「さら」は、この場に集まる少女たちが、外の「社会」のこと、そこに生きる人々を罵る言葉を耳にし、絶望する。「みんな、なぜ争ってばかりいるのだろう。なんで傷つけあうんだろう。」という疑問は、「さら」のなかで日々、大きくなっていった。

ある日、「社会」に対する罵倒の言葉を聞き続けることに堪えられなくなったさらは、この場所を出ることを決意し、この場所にとともにやってきたフエイにだけ、そのことを告げ、ここを出る決心をする。

フエイ：「社会」なんて、「FF」(「社会」やそこに生きる人々に対する罵り言葉)なんて、さらちゃんにはふさわしくないとと思う。

さら：私ね、そうやってみんなが「FF」って「社会」のことを言うのが、耐えられないの。その言葉を聞くたびに、「やっぱり、ここにはいられない」って思うの。「FF」っていう言葉が、一番、今の私を苦しめてる。

フエイ：そっか…。

さら：私にはね。お父さんもお母さんもいて、すごく私のことを愛してくれたの。だから…実を言うとね、「子どもを産む」っていうのが悪いことって、思えなくて。でも、「子どもを産まなきゃいけない」とか「子どもを産んではいけない」っていうことが、フエイやみんなを苦しめているのも許せなくて…どっちの人のことも悪く言いたくないの。

フエイ：そっか…。そうだったんだ。

さら：でもみんな「FF」って言うじゃん。「あいつら『FF』だ」って。なんかそういうのを聞いてるのが、もう耐えられなくなっちゃったんだ。

フェイ.. そうか。わたしは「FF」のことを知らないから、みんながそう言うんだからそうなんだろうって思ってた。そういう酷いところなんだって思ってた。でも、さらちゃんが、言っていることを聞いて、わからなくなってきた。

さら.. そうだよ。私は、フェイの、そういうところが好き。こうやって話したこと、フェイは、いつか忘れちゃうと思う。それでもいい。だから、フェイには伝えておきたかったんだ..。きっと、みんなにもこの思いを聞かれないまま、私はいつの間にかいなくなってしまう。そしてフェイもきっと、そのことも忘れてくれると思う。——私は、それでいい。それで十分。だからせめて、その思いを、最後に伝えたかったんだ。

フェイ.. なんか「FF」っていう言葉がいなくなる時代が来るといいな。

わたしは、さらちゃんのことを忘れちゃうかもしれないけれど、さらちゃんはわたしのことを覚えてくれている。もちろん、わたしが忘れちゃったわたし自身のことも全部覚えていてくれるから、わたしはここで生きていられるなっと思う。

さら.. うん。ありがとう。その言葉を聞いたら、私、ここから出られる気がしてきた。

「ガル―(がる―)」(敬称)――「社会」から隠れて少女たちを助ける大人たちの敬称

年長者のラフーシヤと真理は、私たちに不足している物資について話をする。生きていくためには、私たちを助ける大人たちの援助を受けなければならないのだ。

ラフーシヤ.. 真理、明日だよね。

真理.. あ、なんだっけ、忘れちゃった。

ラフーシヤ.. ガルーに会える日だよ。明日。

真理.. うん。：私たちさ、今、ちょっと食料足りてくない？ お腹すくよね。甘いもの食べたいんだよね。

ラフーシヤ.. なるほどね。うん。別に、そんなのガル―にお願いすればいいんじゃない？

真理.. うん。でもさ、なんか今まで頼んできたものって、本当に最低限のものだったから。ちょっとレベル高くなっちゃうんだけど、どうしたらいいと思う？

ラフーシヤ.. 私に聞いてんの？ そうだねー。いや、私もちょっと肉とか最近食べたなと思って。ガル―に聞いてみる。

真理.. うん。それなんだけどさ。なんか、向こうは持ってきてくれるじゃん。それに対して私たちもさ、ちょっと返す必要があるんじゃないかって思ってるんだよね、

ラフーシヤ.. ガルーに？ だって、ガル―って私達たちことを助ける人じゃない？

真理.. うん。でもさあ、なんていうのかな。でも、私たちの感謝の気持ちを込めて…っしてもいいと思うんだよね。

ラフーシヤ.. なんかある？ 私たちに。

真理.. そりゃーさー…ラフイと言えば！ ガルーに喜んでもらえるような…

ラフーシヤ.. 肉、食べられるなら…

真理.. もちろんだよ！ ラフイの才能をもつてすれば、ちょこちょこって描くだけで、もう一発だと思っよ。

ラフーシャ.. ちょこちょこってわけにはいかないけど、どうだろうな。それで満足してもらえるのか。

真理.. 私がね、思ってるのはね、ガル―Bさん。ガル―Bさんはね、割とそういうことに関心があるっていうか。絶対にね。ガル―Bさんに「ちょっと、ちょっと」って感じで言ったらいけると思うんだよね。

ラフーシャ.. なんか軽く言うよね。描くのは私だよね？

真理.. 私、一応、ガル―Bさんとは、いろいろ話を通じるわけよ。そう。メッセージ送りあうような関係なんだよね。で、ガル―Bさん、ラフィの絵にちょっと興味持ってるみたいなんだ。

ラフーシャ.. いいけどさあ…いいけどさ。なんだろう、なんか釈然としないな。

真理.. でもさあ、こんなことラフィにしか頼めないんだよ。

「儀式(ぎしき)」（特別な催し）—— 私たちという存在を寿ぐ祭

私たちは、ここに集まる私たちという存在を祝うため、「儀式(ぎしき)」と呼ばれる特別なイベントを開催していた。この日は、年少者も年長者も、すべての人々が自分という存在に、そしてお互いの存在に「おめでとう」を言い合う。

ピリーブは、この日、年少者のフェイに、「儀式(ぎしき)」に向けた希望を尋ねようとしていた。

ピリーブ： あんたさあ、なんか食いたいもんある？

フェイ： わたしの食べたいもの？ わたがしとか、楽しい。あと…

ピリーブ： ちよとさ、早くしてね。イライラしてくる。あと、なに？ りんご飴？

フェイ： なに言ってもいいんですか？

ピリーブ： うん。いいよ。

フェイ： なぜ？ それは全部、わたしが決めなきゃいけないんですか？

ピリーブ： みんなに聞いてんの。一応。

フェイ： 他の人にも聞いてるんですか？

ピリーブ： そういえば、前に何か言ってたな。なんだっけ。前に、なんか言ってたね。なんだっけ。…あ！あれあれ！鮎とか言ってた。

鮎の塩焼き。

フェイ： 鮎の塩焼き！ すごいですね。

ピリーブ： 面倒くさいね。あとなんだろ…

フェイ： 焼きそばとか、なんか、素晴らしいじゃないですか。

ピリーブ： できるって言ってないからね。でも儀式ではいつもしたいことしてきたから。終わりはいつも屋台ってイメージ。

「まわりん」(時間の単位)——月経周期

十代の私たちにとって、月経は、特別な意味がある。カレンダーも時計も持たない私たちの「時間」を決めるものは、一人ひとりにとって異なりながらも重なりあう月経周期だ。しかしここには、まだ初潮を迎えていない少女たちもいる。初潮を迎えていない者にとって、その時間の単位も、月経そのものも、完全に、未知なる世界の話だ。その日、さらと真理は、初潮をめぐる互いの状況を探り合っていた。

真理：さらちゃん。

さら：はい！はいはい！

真理：さらちゃんさあ、「まわりん」どう？

さら：どう…ってなんですか？

真理：「どう」は「どう」だよ。

さら：『どう』は『どう』。私、なんか完全に脅かされてますね。私、大丈夫ですか？私、脅かれますか？私にかしましたか？

真理：脅してないよ。聞いているだけ。で、どうなの？

さら：それは、もしかして、真理さんが、「まわりん」を何度も経験されている熟練者だということですか？

真理：いや、私は聞いただけなんですけど。

さら：聞いただけなんですか？

真理：なんかみんなから聞いた。

さら：何を聞いたんですか？

真理：めったにあるものがないって結構大変、って。

さら… なるほど。それは、こういうことでしょうか。なんか…私が聞いたところによると。

真理… うん。

さら… 私が聞いたところによると、全身の穴という穴から、血が噴き出して、その噴き出る血の量がすごく多くて大変…って。

真理… うん。

さら… もし真理さんが、もうすでに、「何まわりん」も経験されてる熟練者だとすると、その大量の血をどこに隠してるのか聞き
たかったんですよ。

真理… 実は…

さら… うん。

真理… それはね。秘密の場所があるんだよ。

さら… ええ！そういう地域があるってことですか！？

真理… そうそう。あそこの山の湖あるじゃん。湖の砂浜みたいところに、穴を掘るんだって。で、そこに入れちゃうんだって！

さら… ええー！

真理… あの湖ってさ、なんか、潮の満ち引きがあるから、なんかそれで、大量の血がもっていかれちゃうんだって。だからね、跡形
もなくなくなるらしいよ。

さら… より生きていきたくなくなりました…。私、やっぱり、ここで生きていけないのかな…。そんな！そんな、血、血の量！そ
れ、みんなして、その存在を隠してるんですか！？ そんなの見たことないですよ、私！なんで真理さんはそれを知ってるん
ですか！？

真理… 私も、教えてもらったんだー。一応、「黙ってて」って言われたから一応黙ってるんだけど。でも、さらちゃんにだけは教えて
あげようかなと思ったんだよね。

さら… …ってことはヒリーブさんとか、ラフーシャさんとか、みんなニコニコして、私に優しくしてくれてるのに、実は、みんなその
存在を秘密にしていたってことなんですか！？ 隠しごととしてたってことなんですか！？

真理… うん。だってさ…

さら： みんな血が噴き出てるのに！？

真理： だって、やっぱりさ、最初はショックじゃん？ 最初はショックで、嫌がる人もいるらしいけど。でも、だんだんそれに慣れるらしいよ。でき、やっぱりね、その間はね。湖の近くにおいて、体を常にきれいにしておかないといけないらしい。うん。

さら： 大人って怖い…。

真理： 怖いよね。私も怖い。

さら： 真理さんも、その怖いことになってるんですか？

真理： 私は話を聞いたただだからわかんないけど、いつかは来るんだろうな。

さら： 「ゼロまわりん」？まだ「ゼロまわりん」？

真理： まだ「ゼロまわりん」。

さら： ちなみに、フェイは「何まわりん」なんですか？

真理： 二十くらいじゃないかな。

さら： フェイだよ！？私の友達のフェイだよ！？

真理： なんかね、実はね。まだ小さいのに二十らしいよ。人間の成長は様々なんだよ。

さら： ええー！？

「あめちゃん」(幸せ)——インターネットで良いことがあった時に感じる幸福感

私たちが外界とつながるルートは、たった二つ——「ガルー」とインターネットだけだ。

外の「社会」とのつながりに意味を感じる者にとって、インターネットはここでは得られない幸福感をもたらしてくれるものだが、外の「社会」にまったく意味を見出せない者にとってそれはほとんど意味をなさない。それでも、それでもその幸福感はあまりにも独特の多幸感をもたらし、それがゆえに、それが理解されないと知っていても、つい、人に話したくなってしまう。まさにそれは、ドラッグII「candy」=「あめちゃん」なのだ。

その日、インターネットではじめて友達ができたさらは、その嬉しさを誰かに伝えたい思いでいっぱいだった。

さら: ビリーブさん！ 聞いてください！ 超「あめちゃん」！ もうほんと、めっちゃ「あめちゃん」！ 「あめちゃん」、「あめちゃん」、「あめちゃん」！ 超「あめちゃん」なことが、いっぱいあったんですよおお！ 私的にはメロン味、マスクメロン味、ウォーターメロン味！

ビリーブ: ウォーターメロンってなんだけ。あれか味薄いやつ。

さら: どっちかっていうと爽やかな感じ！

ビリーブ: で、なにがあったん？

さら: 友達ができたんですよ、！

ビリーブ: いいよ、そんなん。裏切られるよ、すぐ。

さら: いやー、ここ、そういう冷たい人たちばかりだから、もうなんか外の世界とつながるとすごい…「あめちゃん」！って感じるんですよ！

ビリーブ: そんなに飴ほしいならさ、あるからさ。飴、もらったんだよね。ちょっと食う？

さら: いや、その飴じゃないんですよ。

ピリープ：だって、会ったことないんですよ。

さら：会ったわけじゃないです。

ピリープ：そんなのに、「あめちゃん」があつたんだ。そんなやつ、友達かなんてわかんないじゃん。

さら：今から友達になっていくんですよ。ほら、今から！

ピリープ：そんなん騙されてるんだって。まだ少ししか話してないんですよ。わかんないじゃん。「さらちゃんに会いたい」ってことで「かわいい」とかさ、そんなこと言われてさ、騙されてるだけなんだって。

さら：大丈夫。私、醜形恐怖あるから、「かわいい」って言われても疑うだけだから。騙されてないです。：「あめちゃん」！わかんないかなー。やっぱり、ピリープさんにはわからない、「あめちゃん」があるんですね。

ピリープ：あんたけっこう、かわいいよ。

さら：ウソ。ウソ。ウソ。やっぱりこの大人は信じられない。血がいっぱい噴き出してるってことも隠してるし。——ピリープさんは、「あめちゃん」とか、興味ないんですか？

ピリープ：はい。全然興味ない。その方がいい。本当はね。

さら：絶対違いますよ！一八〇度くらい違いますよ！

ピリープ：あんたね、真理あたりに変なこと吹き込まれてるかもしれないけどさ、ちょっと人のこと疑ったほうがいいよ。「本当にそうなのかな」って、ちょっと疑いな。いろんな人のこと。

〔時代二〕

「社会」の側を罵る言葉が至るところで使われるようになり、それに耐えきれなくなったさながら、この場を離れたこと。それは、ひとつの予兆であったのかもしれない。

その時から、なにかが突然動きはじめたかのように、「社会」もこの場所も、なにかも大きく変わりはじめていった。もっとも大きかったのは、私たちにとっての「社会」につながるルートのひとつである、インターネットが失われたことだ。「社会」からの情報は遮断され、私たちが「社会」の側の「友達」とつながりあい、そこから喜びを得ることは不可能になってしまった。

私たちに残されたつながりは、唯一、「ガルー」の存在だけだった。

しかしおそらくそのような状況を知ることだろう。「ガルー」たちの私たちへの態度は、日に日に変わっていった。私たちに、見返りを要求するようになったのだ。私たちは、この場所で生きていくために、「ガルー」たちの要求に応じなければならなくなってしまうのだ。

私たちの自由なユートピアは、少しずつ、崩れはじめているようだった。

「お告げ(おつげ)」（習慣的に行う儀式）——ガルーたちへの定期的な返礼

「ガルー」たちは、いつの間にか、自分たちの援助に対して、見返りを求めるようになっていた。しかし、「社会」から隠れて、廃墟に暮らす私たちが、彼らに渡すことができるものなんて、あるのだろうか。

私たちが困りはてたとき、誰かが言った。「私に、良いアイデアがある。」——真理だった。真理の「良いアイデア」は、いつだって虚偽と結びついていて、私たちはその言葉を聞いたときも、やはりひどく不安だった。それでも、私たちは、真理のその言葉に頼らざるを得なかった。そのくらい、私たちは空っぽで、何も持たない存在だったのだ。

真理は、意気揚々と、その場を離れていった。誰かがいった。「きっと、フェイのところに行ったのよ。」それを聞いて、なにかを言おうとする人が何人かいたけれど、誰も口を開かなかった。みんなが、ただ、黙っていた。

真理.. フェイちゃん。

フェイ.. なに？

真理.. 明後日ってさ、「ガルー」に会うことになるじゃん。

フェイ.. うん。そうなの？

真理.. そうなの。で、今回会わなきゃいけない「ガルー」って、ちょっと要求の多い人です。今回は、ちょっとこれまでの手が使えなさそうなの。それでさ、ちょっとフェイちゃんのカ、借りたいんだよね。

フェイ.. でも、この前も、わたし、神の言葉を聞いて、どこかにプレゼントしてなかった？

真理.. あれ？ そんな記憶があるの？

フェイ.. ううん。記憶はない。だけど、わたし、けっこうもう疲れてて、なんかスカスカになってる感じがして…だから、こういうことが何度も何度もあったんじゃないかなって、そんな気がするの。

真理.. うん、そうだね。疲れてるんなら、そうなのかもね。

フェイ.. ……。

真理.. そしたらさ、もうウソでもいいんじゃない？ホンモノじゃなければ。作っちゃえば。「いずれ、起こるでしょう」っていう感じ、

最近、多いから。そういうのでいいんじゃないかな。

フェイ.. うん。

真理.. 時々、作ってるじゃん。

フェイ.. うん、うん。

真理.. 今回もそれでいいんじゃないかな。私、考えてもいいし、うん。

フェイ.. たしかに。真理さんが作ってくれちゃっていい。

真理.. そうだね。私ができると思うよ。

フェイ.. 例えば、どんなのがいいかな？

真理.. 今回の「ガルー」さんは、ちょっと最近なんかプライベートで悩んでるらしいんだよね。なんかね、ちょっと家庭がうまくいってないらしいんだよ。

フェイ.. そうなの？真理さん、そんなことよく知ってるね。

真理.. 情報通だからね。

フェイ.. へえー！すごい！

真理.. だからさ、ちょっとさ、そこら辺のところをさ、ちよいちよいちよいつていう感じで、ちょっとくすぐって。なんか、要は、気持ちは、ちようですーみたいな感じで。

フェイ.. はいはい。うん。

真理.. そういうところは、気持ちを良くさせてあげる、っていうのが大切だと思うよ。「あなたは悪くない」とか、「きつとうまくいきます」とか。

フェイ.. 他に何かあるかな？

真理.. そうだね。「しばらく待ってみましょう」とかね。で、「当たった」って言われたら、「神のお告げですから」って言って、「当たらないかった」って言われたら、「それは、こういう意味だったんですよ」ってあとで言えるような感じで。

フェイ.. 真理さん、すごい。

真理.. とりあえずは、そんな感じで。

フェイ.. うん。

真理.. なんか、「今、光が見えます。その光はまだまだ小さいけれども、大きくなっていく予感がします。あなたに悪いことは起こらないと思います。すべては、すべてでは良い方向へ：！」くらいに言うておくと、うん。何回か転んじやっても、「それはいいことなんですよ」って、後で言い訳がきくから、そんな感じがいいんだよね。うん。

フェイ.. でも、そんなこと言っちゃって、大丈夫なんですか？

真理.. だって、「ガル」ね。今度の「ガル」も、ずいぶん、私たちのこと面倒見てくれてるじゃない。なんか、さすがにちょっと悪いかんがって思ってたからさ。だからさ、私たちはさ、せめて、その人の心をさ、軽くしてあげてるって思えばさ、いいことなんだと思っただよね。

フェイ.. そっか。うん、そうしよう。ありがとう。真理さん。

「SHIMMER(しみ)(凶兆)——」社会」からの締め付けの強まりを感じさせる凶兆

インターネットの遮断は、「社会」からの悪意のあらわれだった。

しかし、これは、単なる始まり、ひとつの小さなあらわれに過ぎないのではないかと感じていた者たちがいた。ビリーブと、フェイである。信じるものを異にする二人の少女は、それでも自分が感じた「SHIMMER」がなにであるのかを知りたくて、互いに話しかける。

フェイ： ビリーブさん、ちょっと相談してもいいですか？

ビリーブ： うん。私もちょっとフェイに聞きたいこと、あったんだ。先に話して。

フェイ： どうぞどうぞ。お先にどうぞ。

ビリーブ： そっちの話、先にして。私が気づいたこと、同じかもしれないし。

フェイ： それは、こっちも同じで。同じことかもしれないから、先に言ってください。

ビリーブ： あのさあ、あんたのこと頼るの嫌なだけでさ、この間、記憶をなくしたときさ……あんた、なに聞いた？

フェイ： ……。

ビリーブ： ほら、記憶をなくしたとき。この間。

フェイ： ……うん。

ビリーブ： 知ってんだよ、こっそりやってるの。

フェイ： うん。

ビリーブ： 言葉を聞くとさ、こっそり一人でないなくなるでしょ？ みんなに内緒で。

フェイ： この間、こっそり……。知ってて、ついてきたんですか？

ピリーブ： たまたま見かけて、申し訳ないかなとは思っただけど、どうしても気になっちゃって……。いつもと、違ったの見ちゃったから。……なんか、ちょっとさ、あの暗い感じのさ、「SHRM」が広がっていく感じのイメージ、見ちゃってさ。これって、また、なにあるのかな、って思っちゃって。

フェイ： わたしも、そのことをピリーブさんに相談したかったんです。いつもは、いつもだったら言葉がクリアに降りてくるはずで。だけれど、今回は、最後の方がちょっとモヤモヤってなってしまうって…何か適当に打った文字列みたいになっちゃって…。あんな出来事は初めてだったんです。だから、何なのかなってすぐモヤモヤしてたんだけど。…でも今、ピリーブさんの話を聞いて、それはピリーブさんが、勝手にこっそりついてきていたからなのかなって思いました。「SHRM」じゃなくて。

ピリーブ： ちょっともう一回、聞いてみてよ。

フェイ： もう一回、同じこと聞けるかなんて、わからないです。

ピリーブ： もう一回いけるって。ほら、あんたさ、前に、記憶うしなうてからそんなに時間経ってないからさ、もう一回、今、記憶なくしても大丈夫だよ。

フェイ： 一人で？ なんについて聞いてほしいんですか？

ピリーブ： そんなことできるの？

フェイ： できます。でないと聞けません。ピリーブさんだっで見てるじゃないですか。

ピリーブ： 何を？

フェイ： 未来を。だから、そのへんはわかってもらえると思ってました。

ピリーブ： コントロールできないから、私は。突然、見えちゃってるだけだから。

フェイ： そっか。じゃあ「SHRM」について聞いてみましょうか？

ピリーブ： 「SHRM」についてっていうか…「ヨグレ」について？

フェイ： 「SHRM」と「ヨグレ」ってどう違うんですか？

ピリーブ： 「ヨグレ」じゃない、「SHRM」もあるんじゃない？

フェイ… …。

ピリーブ… …。

フェイ… …：なんか、よくわからなくなりました。

ピリーブ… …：「ヨゴレ」は、悪い「SH-M」。悪い「SH-M」がこれから、どうなっていくか、神様に聞いてきて。あ！そうそうそ

うそう！「ガル」がさ、リングくれたんだよ。リングやるから聞いてきて。戻ってきたらやるから。

フェイ… …：先にください。

ピリーブ… …：うん。しかたないな。

フェイ… …：わかりました。じゃあ、ちよつと聞いてみようかな。あ！でも、満月じゃないと聞けない！

ピリーブ… …：そうだった、そうだった。じゃあ、今日は無理だ。今日の月は。

フェイ… …：この前聞いたばかりだから、あと「一まわりん」、待たなきゃ。

「FF」の広義化——「社会」のアイツらと、「社会」に取り込まれたかつての仲間たち

「社会」へのルートを失い、私たちの共同体が孤立を深めるにつれ、ここを逃げ出す少女たちが次から次へとあらわれるようになった。かつて、私たちとアイツらとを隔てる言葉だった「FF」という言葉を、私たちは、かつての仲間たちに向ける言葉として使いはじめた。この共同体を出ていった裏切り者は、「FF」と呼ばれるにふさわしい！ 私たちは、そんなふうを考えるようになっていた。

ピリブ： ラフィーシャ、私たちさ、「FF」から逃げたっていうかさ、隠れたっていうか…

ラフィーシャ： うん。

ピリブ： 嫌いはずなんだけど。それでも、たまに、いや、「FF」っていいのかな、とかさ、思ったりもするんだよね。ほら、インターネットとかさ、前はあったわけだし。

ラフィーシャ： ……。

ピリブ： どうしたの？

ラフィーシャ： ……いや、今、ちょっとびっくりした。なんか、「FF」いいと思ってるんだと思って…

ピリブ： 思っていないよ！…思っていないけど…でも、家族がさ、「FF」にいる子もいるじゃん。さらみみたいな子もいるわけじゃん。

ラフィーシャ： 私は、絶対、許さない。

ピリブ： ラフィーシャは、「FF」で評価高かったんでしょ？

ラフィーシャ： 誰が。

ピリブ： あんたの作品。

ラフィーシャ： それは、だって利用されてるだけじゃん、「FF」に。

ビリーブ.. でも、なんかさ、自分の描いたものを売るのがOKしてるじゃん。「FF」に。

ラーシャー.. 利用はするよ。食べていかなきゃいけないからね。利用できるものはなんでも利用する。だけど、絶対「FF」の仲間にはならない。

ビリーブ.. 誰かさ、行きそう…って思う？

ラーシャー.. そうだね。…正直、真理は…。でもあいつ、けっこう有能だからね。

ビリーブ.. 真理は、なんか、信じらんないんだよね、なんか。

ラーシャー.. なんだろう。うまいよね。なんか、その気にさせるのが。でも、真理は「FF」には行かない気がする。「FF」に行っちゃったら、その他大勢と一緒にだもんね。

ビリーブ.. いやなんかさ、「FF」から逃げてきたのにさ、あんた最後にどうなるのかは、一番、どうでもよさそうだった。

ラーシャー.. そう見えるんだね。やっぱり。正直、産みたいとか、産みたくないとかかじゃないんだよね。産ませようとする——それが、許せない。受け付けられない。

ビリーブ.. 産みたいとかはよくわかんないけど、セックスしてみたいなどかかと思うけど。でも、それがさ、「産め」となると、ちょっと、正直、それがなんか…かそういうのを動かされるのはすごい、放ってけっと思う。

ラーシャー.. そこは、一緒かな。

「卒業」(死／戻らない喪失)——共同体の死・アイデンティティの死

日に日に強くなる悪い予感と、ここを出ていく者の多さは、私たちに、ここという場所の終わりを予感させた。

しかし、この場所がなくなるというのは、いったいどういうことなのか？ この共同体がなくなるということは、私たちというアイデンティティそのものがなくなるということだ。それがいったいどういうことなのか。そんな先の見えない問いを、ラフィーとフェイは話し続けていた。

ラフィーシャ：最近、「SH—M—」が広がってきてるよね。

フェイ：うん、そうみたいですね。

ラフィーシャ：私、予言とかはできないけど、なにか感じるんだよね。なんだろう。不安みたいなの。

フェイ：ラフィーシャさんも、不安になるんですね。

ラフィーシャ：なんだろう、私もわからない。わからないけど、何かが起こりそうな…何かを失いそうな、そんな感じがする。

フェイ：何かを失う。

ラフィーシャ：フェイの力で、何かわからないかな。

フェイ：「失う」ということがそんなに怖いことなのかどうか、わたしには、あんまりわからないんです。わからないんだけど、でも、ラフィーシャさんの絵を見ると、なんとなく、わかるような気もします。見ていると、その「怖い」という気持ちだけは伝わってくる。

ラフィーシャ：ときどき、「SH—M—」っていう言葉と「卒業」っていう言葉が、何か心に湧きあがってくる。

フェイ：「卒業」ってどういうことですか？

ラフィーシャ：なんだろうね。今、私が怖いと思っているのは、私が、「FF」になっちゃうかもしれない、っていう不安。なりたくないと思う気持ちは、もちろんあるよ？…あるけど…「卒業」しちゃうんじゃないか、って。

フェイ.. 全然イメージできない。

ラーシャ.. もちろん、なりたくないし、なるつもりはない。だけど、さらとか、他の仲間たちが「FF」になっていくのを見てると、自分がそういうふうにならないって言いきれれるのになって。

フェイ.. わたしは、「FF」には、なりたくてもなれない。たぶん、また忘れちゃうので、たとえ、なつたとしても忘れてしまう。だから「FF」にはなれないし、「卒業」と言われても……そもそも始まってすらいらない。だから、あんまりわかりません。わからないけどラーシャさんは、卒業するしたら最後の人なんじゃないかな、と思う。他の人が卒業していても、ラーシャさんだけは最後まで残りそうな気がする。——でもそれは、ラーシャさんにとって、望みどおりのことなんですか？

ラーシャ.. 最後の一人になる。どうだろうね。順番の問題かな。——この前、ビリーブと話してて思ったんだよ。「FF」にはなりたくない、絶対ならない言っただけど、ならない保証って、いったいどこにあるんだろう？「卒業」しないっていう保証ってどこにあるんだろう。最後まで残ったら、そして、このコミュニティ自体が「卒業」しちゃったら、私が一人で残る意味はどこにあるんだろう？

フェイ.. そうか、みんなのために、ラーシャさんは、いるんですね。「卒業」について考えてみたけど、やっぱり、あんまりわからない。考えても、考えても、わからない。でもみんな「卒業」「卒業」って言ってる。

ラーシャ.. これからどうなるかわからない。「FF」になりたいかって、戻りたいかって聞かれた、それはやっぱり、戻りたくはない。「卒業も」したくない。けどちょっと不安。私は、「卒業」しない方法を知りたいのかな。でも、それをフェイに聞くほうが酷だよ。

フェイ.. でもわたしは、皆に比べたら、失うものがないから聞いてこようかな。神様に聞いてみる。今日は満月だから、消耗しない。わたしはわからないけど、皆がすごくつらそうで、でも、わたしはそんなに怖くないから、そうするのがいいと思う。

ラーシャ.. ごめんね。

フェイ.. 謝らないで。私は、ラーシャさんにすごく感謝してるから。行ってきます。

〔時代三〕

「SHOEM」という言葉で、私たちが日々語り合っていた、その不安は、ある日、突然現実のものとなった。はじめに、発見したのは、フェイだった。何もかがここにやって来て、私たちの仲間を、殺しはじめたのだ。私たちは、さびれたラジオ局に籠城することを決めた。この鬱蒼とした廢墟群は、もはや安全な場所ではなくなったのだ。「卒業」という言葉が、私たちの思考のほとんどを奪いかねない勢いで、私たちの頭のなかを駆け巡っていた。

「社会」による単語「卒業」の盗用（新たな話者）——幸福なゴールとしての「卒業」

この鬱蒼とした廃墟群のなかに、「社会」の権力者たちがやってきて、仲間たちを捕らえ、殺しはじめていることは明らかだ。そんなある日、真理は、「ガル」から一冊の雑誌を手渡される。インターネットが遮断されて以来、ひどく久しぶりに見る、外の世界II「社会」の情報。真理は思わずその雑誌を広げる。そこにあったのは、信じられない言葉だった。

真理 ラフォーシャ、私ね、ちょっと「ガル」からこの雑誌をもらったの。これさ、巻頭ページにさ、「卒業おめでとう」って記事が載ってるんだよね。

ラフォーシャ それ…。

真理 卒業！（雑誌の巻頭ページを広げて）この、これなんだけどさ。なんか白い服着て、ベールかけて、「卒業おめでとう」って書いてある。こんなのさ、全然めでたくないよね？

ラフォーシャ 何、これ？

真理 ねえ、これって！これって、あの子だよ。ほら、あの子！あそこの木の陰によくいた…

ラフォーシャ ちょっと見せて。

真理 うん。ねえ、この写真！最近見ないと思ったけど…なんかさ、笑ってるよね？これ、笑ってるのかな。

ラフォーシャ 写真とかより…なんで、なんで、「卒業」って言葉知ってるの？私たちの言葉だよ。

真理 うん…うん。なんでだろうね。誰かが…誰かが言ったのかもね。だって、ここにいた子たち、もう七人もいなくなった。あの子も、あの子も、あの子もいなくなったじゃん！誰かが言ったのかも知れない。私たちのことも、たくさんたくさん知られてるんだらうね。

ラフォーシャ でも、「卒業」って、そういう意味？ 私たちにとって、「卒業」ってそういう意味だった？

真理：「おめでとう」って書いてある。ねえ、笑ってるんだよ。「卒業」って。「おめでとう」って。私たちが「卒業」したくないの知って。なんかこれ！こっち見てみると、「卒業」した人たちのコメントみたいなのがいっぱい載ってるんだけど、「私も、大人になりました」、って書いてあるんだよね。私たちは、成長できてないってこと！？」

ラフーシャ：——それ、どこの出版社？

真理：（雑誌の裏面を見る）——「政府広報」。

ラフーシャ：国が出してるんだね。やりやがった。ここまでやるんだ。わかりやすい。誰がやったのか、隠すつもりもない。

真理：ここに、「最後にこんなふうにして、いろいろな女の子たちが卒業していきました。」って書いてある。「卒業おめでとう。」「まだ、卒業していないあなたもいつか卒業できるでしょう。」

ラフーシャ：なんなんだろう。あいつらは、何が言いたいの？ 許せない！ これは、「卒業」は、私たちの言葉でしょう？ なんて…なんでこんなふうに使われてるんだらうね。それとも何？ 「卒業」しなかったらどうなるっていうの？

真理：私たち、どこかに行けるのかな。

ラフーシャ：どこかってどこ？

真理：なにか、なんとか逃げて、どこかに行けるかな。

ラフーシャ：真理。それが「卒業」ってことだよ。

真理：いや、「卒業」じゃない！ 「FF」にはいかない！ でも、ここにも残らない。——できないのかな。

ラフーシャ：行くところなんて、どこにもない。真理、ここまで来たときのことを思い出して。ここまで来るってことだけでも、あんなに大変だったじゃない。

真理：…もうやだ…。もうやだ！もうやだ！もうやだよ！！

「りぼん(Re born)」(結束)——世界中に散在している、隠れた少女たちとのつながり

かつての仲間たちを次々と失うなかで、私たちは、日々、孤立していった。孤立と孤独は違うけれど、それでも、日々、深刻さをましていくその孤立は、否応なく、私たちの孤独感を生み出していった。自分の意志とは裏腹に、大きくなり荒れ狂う孤独感に、真つ先に耐えられなくなったのは、真理だった。

真理は、ビリーブに話してみよう、と思った。ビリーブに未来が見えているのかいのかは、わからない。けれど、たとえ見えていなくても、未来とどこかでつながっているビリーブが自分には必要だと、真理は思ったのだ。

真理.. ビリーブ。なんか、もう、ほとんど私たちだけになっちゃったね。

ビリーブ.. そうだね。

真理.. ——ビリーブも、「卒業」するの？

ビリーブ.. ……。

真理.. ……。

ビリーブ.. ——何人、死んだ？

真理.. 昨日。二人。

ビリーブ.. …あいつらさ…、あいつら、やってることおかしんだよ。だって、「産め」ってさ、「人間増やせ」ってことじゃん。

真理.. うん。

ビリーブ.. なのにさ、私たち、減らされててさ。

真理.. うん。

ビリーブ.. わけわかんないよね。

真理.. うん。

ピリーブ… 私たちがいることを、知らせられないのかな。なんか、私たちみたいな人たち、他にいないのかな。世界広いんだし、いないのかな。

真理… ——。

ピリーブ… 真理。あんたのさ、調子いい言葉でさ、あれ使いなよ。

真理… あれ？

ピリーブ… ここ、ラジオ局だったんだよ。きつと、直せる。——直せたらさ、うん。直せたら、あんたがラジオ使って放送して、「私たちはここにいます」って、「私たちと「りぼん」で結べる人いないかな」とか、あんたの、その、調子良いことプラプラいう言葉でさ、ラジオ放送したらどうか。なんかさ、わかってくれる人、どこかにいないのかな。

真理… …やれるのかな…。

ピリーブ… もう…もうさ、インターネットもないでしょ、本当は。いや、でもさ、あんたは、しゃべれるからさ。あんたの言うこと、けっこう、みんなに響くからからさ。放送してよ。ラフーシャに怒られたらさ、一緒に、怒られてやるから。やれること、探してみようよ。

真理… ——そうだね…。そうだね！ もう、もうできることはそれぐらいかもしれないよね。せつかく、ラジオ局にいるんだから。

ピリーブ… うん。

真理… やる。やるよ。

ピリーブ… うん。明日さ、みんな起きたらさ、もしかしたら最後の一日になっちゃうかもしれないけどさ、やろうよ。うん。

真理… やる。私、やってみるよ。

「ダブル」(希望)——「ガル」が夢見ていたはずの未来(像)

絶望的な状況のなか、私たちはそれぞれに、「卒業」から逃れるための道を探りはじめる。ビリーブと真理は、ラジオ放送を使って、世界中に散らばった、私たちと同じような状況にある同士たち呼びかけることを思いつく。ラフーシャやフェイがそれに同意するかどうかはわからない。けれど、私たちと同じような者たちが連帯しあうことは、一筋の光をもたらしてくれるように思えたのだ。そんな中、ラフーシャは、かつて、「ガル」たちが語っていた未来の姿のことを思い出す。ガルたちが理想として語っていた、「ダブル」と呼ばれていたその未来像は、彼らにとって、私たちにあって、いったい、何だったのか。

ラフーシャ：怖いね。どうなっちゃうんだろうね。

真理：「卒業」のこと？

ラフーシャ：そのあと、私たち、どうなっちゃうのかな？

真理：どうだろうね

ラフーシャ：「ガル」は、どうしているんだろう。今まで、あんなに助けってくれたのに、こんなことになっちゃって。あるいは、「ガル」には「ガル」の事情があるんだろうか。

真理：「ガル」も、生きていかなきゃいけない。自分たちのことで精一杯なんだよ。最近、「ガル」と会った？

ラフーシャ：見かけただけ。話はしなかった。

真理：もう一回、助けられるかな。

ラフーシャ：あんまり話できなかったし、どうだろう。最近、もう、わかんないな。昔は確かに、私たちのことを助けたいと思っ
ていてくれたと思うけど……今はどうだろうか。

真理：助けるために何かをよこせ、っていうのもあったしね。

ラフーシヤ.. 本当に私たちを助けたのか。どうなんだろう。このままだと私たちは、「卒業」になっちゃうじゃない？ そうすると「ダブル」は実現しない。「ダブル」になったらどうなんだろう。私たちは、「ダブル」になれるのか。

真理.. どこかで「ダブル」が実現するってこともあるのかな。私たちとは違う、どこかの他の人たちが、「ダブル」になるかもしれない。い。

ラフーシヤ.. 本当に私たちを助けたのか。どうなんだろう。このままだと私たちは、「卒業」になっちゃうじゃない？ そうすると「ダブル」は実現しない。「ダブル」になったらどうなんだろう。私たちは、「ダブル」になれるのか。「ダブル」が実現したら、私たちは自身、他の人たちの「ダブル」になるのかもしれない。

真理.. 私たちが、外部の希望になるってこと？

ラフーシヤ.. それもちよと違うよね。どうなんだろう。そしてそれは、私達の幸せとは、違っていいのか。そもそも、「ガル」に、私たちの幸せがわかるんだろうか。

真理.. 「ガル」が「ダブル」を待ち望んでいたとしても、それは私たちではなく、「ガル」自身がそれを守らないとね。

ラフーシヤ.. 「ガル」って、私たち以外の他の子どもたちにも会っているんだろうか。

真理.. どうか.....。もう、私たちだけだとは思うけど。

ラフーシヤ.. 私だけではないかもしれない。私は、「ガル」に連れてこられて、ここに来た。だけど、ここ以外のことは知らない。

真理.. そっか。他にも、世界のどこかに、私たちみたいな子どもがいても、全然おかしくないよね。

ラフーシヤ.. 私たちには、「ダブル」がある。「ガル」のことはよくわからないけど、もしか「ガル」が、私たち「ダブル」という希望を見出しているんだしたら、私たちを外に連れ出してってくれるなら、もう一度、「ガル」を信じてみていいのかもしれない。

「いちる」(「SHOWER」の対義語「吉兆」)——崩れはじめる「社会」を感じさせる出来事

真理とピリーブの努力によって、私たちの住処でしかなかったその場所は、「ラジオ局」として復活した。インターネットが遮断され、長らく外の世界とのつながりが途絶えていた私たちの共同体に、ふたたび、外の世界へと呼びかける手段がもたらされたのだ。

私たちは、絶望しかないこの状況のなかで、ラジオを通じて世界中に届けられる、私たちの「声」に望みをたくすことにした。世界中に散らばっている、私たちのような存在に呼びかけることにしたのだ。

ピリーブ： 十二時ちようどになったら、やるよ。

真理： うん。そしたら、ピリーブ、カウントダウンしてくれる？

ピリーブ： オッケー。五、四、三、二、一。(真理に合図をする)

真理： ——。「りぼーん」。「りぼーん」。私たちは、「りぼん」を求めています。誰か、答えてください。聞いてください。私達の声聞いてください。私たちはここにいます。あなたはどこにいますか？ これを聞いたら、おはがきください。できるだけ、早くください。そして、私たちは、「りぼん」になりましょう。「りぼん」になって、そして、なんとか、ともに生きていきましょう。おはがき待っています。——(小声で)これでいいかな。忘れたこと、ないかな。

ピリーブ： (マイクに向かって)私は、このファッキン・ファームが、「FF」が、「社会」が、我慢できない人、きつと、いっぱいいると思う。私たちは、女の子たちだけで、こうやって生きてきて——たぶん、バラバラになるんですけど、私たちは、「りぼん」で結ばれてると思ってる。私たちだけじゃなくて、聞いている誰か。「りぼん」で結ばれてると思ってる人。すぐ来てほしい。私たちにその意志を、伝えてほしい。——(小声で)まわすよ。

ラフーシャ： (ピリーブからマイクを受け取って)私の作品を見てくれた人、聞いてますか？ 私は、ラフーシャです。私の作品を通して、私たちの声を通して、もう一度、つながりたい。もう一度、つながってくれれば、信じてます。

フェイ.. (ラフォーシャからマイクを受け取って) ねえ、さら、聞いている？ さら、私、思い出したよ。きっと、さらは今、「FF」にいるよね。「FF」は、私にとって、生きる価値のない場所だった。今でもそう思っているけれど、さらがいるから、大丈夫かもしれない。さらは申し訳なさそうに「社会」に戻っていった。：だけど、さらがいるから、「社会」には「いちる」が起ころんじやないかって思う。今日は満月じゃないから、私は神様の声を聞けないし、もう神様の声は聞かないかもしれない。そしたら、もう、何も忘れない。——これから、何が起ころるか、私には、わからないけれど、でも、ここに連れてきてくれたさらには感謝している。みんなにも感謝している。：お礼を言うことができ、すごく良かった。ありがとう。(真理に、マイクを渡す)

真理.. (フェイからマイクを受け取って) はい、皆さん。聞いてもらえましたか？ これを聞いたら、みんなの反応、待ってるよ。最後に、この曲を聞いてください。《What a Wonderful World》!

音楽《What a Wonderful World》が流れる。

〔遺されゆくもの〕

私たちのこの場所から、外部の世界に向かってラジオ放送が流れ、それは、当然のことながら、「社会」の人々の耳にも届いた。この声を聞いた、「社会」の人々が、それをどう受け止めたのかは、わからない。ただ一つ、確かなことは、そこには「いちる」が存在していたということだ。ほんの少しだけ変わり始めた「社会」の空気を感じながら、私たちは、それぞれの思いをもって、「社会」の側に戻ることにした。それは、他の誰かから見たら、「社会」への服従であることにならない、かもしれない。それでも、私たちの物語が、そこで終わることはないのだ。絶対に。

フェイの物語——壁が崩れ落ちると同時に

フェイ.. その場所は、結局大人たちの圧倒的な力のもとに、終わりました。「卒業」を迎えたのです。最後の砦であったラジオ局も、大人たちによって壊されました。その瞬間を私は見ていました。私は体が小さいのでうまく身を隠して、(崩れ落ちていくな)(大人は容赦なく壊すな)(もしかしたらその下にいた仲間の何人かは命を落としかもしれないな)などと妙に冷めた目でその様子を見ていました。

…と同時に、私は(さて、どうしよう)と思いました。私はその直前、ラジオのマイク越しにさらちゃんに語りかけ、それをきっかけに記憶の一部を取り戻していました。でも、思い出せたことと思いつけなかったことが混在していました。それ以上に問題だったのが、自分の中身が空っぽなことでした。それまでずっと空っぽのまま来てしまっていたし、空っぽでいることに慣れてしまっていました。その場所では預言者としての役割のおかげで空っぽである私にも価値がありました。もはやそれすら失ってしまいました。だから、まず自分の欠片を集めることから始めなければ、と考えました。

とはいえ、さらちゃんに手を引かれてやって来た道を戻ったとしても、その先には私の居場所がありません。そこに戻りたいわけでもありませんでした。なので、私はもう自分は死んだということにしました。この崩れ落ちた壁の下に私もいたことにして、違う名前、違う人物になりすまして、旅に出ることにしました。

私には、パスポートも戸籍もなかったため、出産の選別の網を潜り抜けました。それは、自由の代わりに保証を失うことでした。私は正規の方法では食いつなぐことができず、自立たないように、人々の記憶に残らないように、慎重にふるまいながら各地を転々としてきました。仕事も次々変えました。なかでも上手にできたのは流しの占い師でした。

そうこうするうちに、私はかつての仲間のその後を少しずつ知ることになります。彼女たちは、この「FF」における「いちろ」でした。私はやがて、散り散りになった「いちろ」を極秘につなぐミッションを担うようになりました。

でも、もちろん、そんな私の存在は記録に残ってはいません。

ラフーシャの物語——遠くに灯る、かすかな記憶の断片を求めて

ラフーシャ.. 私たちの生活の拠点だったラジオ局は、「FF」によってこの世界から完全に排除された。私たちは、コミュニティごと

「卒業」させられたのだ。廃墟から引きずり出されるとき、誰かが嘲るように言った。

「卒業おめでとう」。

笑いを含んだその声が、耳に焼きついた。他の仲間がどうなったのかは、わからない。

連れ戻された「FF」の社会で、私は完全な沈黙を選んだ。かつて数々の作品を産み出した手は、何も産まなくなった。描くことはすなわち、「FF」の道具になることだ。やつらのために描くくらいなら、沈黙の中で生きる。そう決めた。

やがて、私は子を産んだ。その子の父親がどんな人間なのかは知らない。私は、その子に、「いちる」と名付けた。希望の光がわずかにでも残ることを信じて毎日を生きのびるために。

「いちる」が十二歳になったその日、私はもう一度、あの場所へ行くことと決めた。

かつて仲間たちと生活をもにした廃墟は荒れ果て、ラジオ局は跡形もなく静かに消え去っていた。そこにはもう人の影はない。ふと、近くの壁を見て、私ははっとした。そこにあったのは、風化しつつも、わずかな痕跡を残す“落書き”だった。私は、そと輪郭をなくしたその落書きを指でなぞった。そして、手さげかばんを探り、スプレーの缶を取り出した。今しか、その場所ですら描けないラフーシャの絵を描くために。

「何ていう絵？」。

どれくらい時間が経っただろう。いつまでも飽くことなく描き続ける私の横で、「いちる」が静かに尋ねた。名前なんて最初からない。

「忘れられたものための絵だよ。」

私は、そう答えた。

やがて、手が動きを止めた。私は祈るような気持ちで、絵が息を吹き返すのを待った。壁面に重ねた線のひとつひとつに、ビリーブ、ファイ、真理、さら、他の仲間たちのかけらが宿るのをひたすら待ち続けた。

真理の物語——認められたかった私の、死と再生

真理

あの廃墟に来る前の私は、いじめられ疎外された存在だった。あの廃墟では、過去の裏返しとしての承認欲求で、自分をよく見せようとして嘘を重ねていった。私の話をそれなりに聞いてくれて、正直、嬉しかった。私の言葉が、人の気持ちを動かして思った。力を持つて、こういうことなんだって感じた。…まあ、適当にあしらわれているというところもあったけど。でも、あの追いつめられていく過程の中で、ピリープが「ラジオ、あんただったらできるよ」と言ってくれた。初めて人に本当に受け入れられたと思った。人に認められて自分の存在意義を実感できた。そのことは、その後の自分にも生きる力みたいなのを与えてくれている。

私たちのラジオは誰かに届いたのだろうか…。チャットもない、スパチャもない、相手の反応が分からない中で呼びかけ続けた。「ガル」は聞いていたのだろうか。

私たちの目の前に立ちはだかったのは、「FF」の大人たちだった。そして、私たちの楽園は終わりを告げた。私たちは大人たちの手によって「保護」され、バラバラにされて、「しかるべき場所」に連れていかれた。

私は最終的に「卒業」を迎え、私は「FF」の一員になった。それが私にとって唯一生き延びる手段だった。でも、あの廃墟での記憶があるから、自分はまだ虚勢を張ることもないし、嘘をつけて自分の嘘の殻に閉じこもることもない。インターネットの発信も、もうすることはなくなった。

あれから長い時が流れた。「ダブル」は実現していない…。今のところは。そして、「りぼん」の向こう端は見えていない。

ただ、インターネットの配信を見ていて、「りぼん」というワードを見かけると、はっと思う。何かこれからの社会の可能性みたいなものを静かに感じながら、「FF」の日常を生きている。

ビリーブの物語——灰の山に見える、燃え尽きぬもの。燃え尽きぬ私たち。

ビリーブ：あの出来事を思い出すのはとても辛い。あの場所のことを考えることもできない。「FF」に排除されたあとに姉を探したけれど、かつての入院先にはいなかった。

私には、誰も、いなくなった。

私に【見える】のは、「私たち」についてのイメージだった。かつては、姉と自分が【見え】た。あの場所では、ほかの女の子たちと自分が、【見え】ていた。今はもうなにも、【見え】ることはなくて、それは、私にはもう、「私たち」が無いから。

排除の次にあったのは、検査だった。「社会」は、私を、出産すべきでない人間と判定した。そのあと、労働者として無能だといふことがわかると——絶えず機械を壊して、逃げ出していたから——、「FF」も、ほうっておいてくれるようになった。自分でも、もう、自分をほうっておいてあげることにした。そうしたら、ちょっと楽だった。胃が痛むと、「FF」が捨てたものを拾って、口に入れる。身体から流れでるものは流れでるままに、ただ、眠って起きて。悪臭や見た目であまりにも苦情が大きくなると、「FF」は、私を收容する。でも、そこにはもう、切迫感はない。收容施設に運ぶ小型トラックの荷台に鍵はかかっている。役立たずにはどこかに行ってもらったほうが、「FF」にとっても都合なのだろう。赤信号かなにかで停まっているときに、おりればいいだけ。

みんなのことを思いだしてしまいそうになると、いそいで、爪を噛んだり、血が出るまでふくらはぎを強く掻いたりして、痛みで思考を散らすようになった。声は出さない。だってあるとき、あれだけ声をふりしぼったのに、どこからも助けは来なかったから。

ああ、だめ。思いだしては、だめ。

「FF」の小型トラックが停まる。おりる。発車していく。樹が密に生え、蔦がからまって松に這いのぼり、カーテンのようにぶ厚くたれさがる暗い場所だ。大きな虫が飛びまわる。振りはらう。腕が蔦のカーテンをはねる。瞬間、まぶしさに目をつむる。ゆっくりとあける。

蔦の壁。廢墟とそれを囲む荒れた森との境。

あまりにも多くのものが失われ、損なわれてしまった場所のうえに、青すぎる空がひろがっている——気づいた瞬間に、逃げようとした。吐く息、吸う息のひとつひとつに、痛みがひろがる。ここは……思い出せば、だめ。ここにはいられない、「FF」の収容施設のほうがよほどマシだ。

よたよたと向きをかえる。

そのとき、むこうの壁に、何かほかとはちがうかけらがみえる。手前に崩れた壁に邪魔されて、端だけが、けれどどうしようもなく惹きつけられる何かがみえる。意志とは無関係なところで、私は歩きはじめている。

壁の前に立つ。

指先で、そっと、絵にふれる。鼓動が速く、強くなっていく。

——知ってる。これは、あの日の前日に、最後に【見え】てしまったイメージ。心を落ち着かせられないまま、ラジオ局が陥落した前の日に、落書きしてた。

——でも、ちがう。描きかえられている。描き加えられている。

嗚咽が噴きこぼれる。ラフーシャの、真理の、フエイの、さらの音が、喧嘩したり笑いあったりした、自分たちの声が聴こえる。そのとき私には、灰のなかに芽吹くものが【見】える。「りぼん」はちぎれても、燃えつきてはいない。

これが、私たちの、そして、私たちの言葉の物語である。

言語文化教育研究会第九十九回例会
「ダイアレクト」リプレイ(電子版)

禁じられた娘たち (公開版)

発行日 初版 令和七年三月二六日

公開版 令和七年五月五日

著者 石田喜美・大平幸・草谷緑・中山由佳・山本冴里

発行者 言語文化教育研究会研究企画委員会